様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０２５５

研究課題名（和文）芸術家との協働によるワークショップ型授業における教師の実践力育成プログラムの開発

研究課題名（英文）Training program for teachers developing skills required to organize a workshop in cooperation with artists

研究代表者
城間　祥子（Shiroma, Shoko）

上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・講師

研究者番号：３０４５７３７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ワークショップ型授業を実践できる教師の育成方法について明らかにすることを目的としている。「正解のない課題を参加者が全員で探究する」というワークショップにおける学びの特性を踏まえ、このプロセスが可視化されやすい芸術家との協働による授業を対象として、ワークショップ型授業を行う教師に求められる力、教育実践の意味づけ、コミュニケーション観について検討した。また、教師を目指す学生及び現職教員を対象として、ワークショップ型授業の実践力育成プログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：Workshop is regarded as an effective method of enhancing the problem-solving ability of students. The aim of this study was to understand the teachers' skills required to organize a workshop in cooperation with artists. Qualitative analysis of learning process showed that learners' perspective on communication was one of the important factor that should be considered in designing the training program.

研究分野：教育心理学

キーワード：ワークショップ型授業　教育実践研究

１．研究開始当初の背景

(1) 社会的背景

ワークショップは、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり、創り出したりする学びと創造のスタイル」（中野、2001）として、1990 年代以降、社会教育、演劇、美術、まちづくり、企業研修など多様な分野において急速に広がってきた活動である。

学校教育では、人権教育、国際理解教育、メディアリテラシー教育、演劇教育などの領域を中心にワークショップ型授業が行われてきた。2010 年度からは、文部科学省によって、芸術家を学校に派遣してワークショップ型授業を実施する「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」が始まり、ますます関心が高まっている。

(2) ワークショップに関する先行研究

ワークショップに関する研究は、実践報告を除けば大きく３種類に分類される。１つめは、ワークショップの理念や学習論など、ワークショップの基礎理論に関する研究である。ワークショップの源流がデューイの教育哲学やレヴィンのグループ・ダイナミクスにあること、ワークショップの学びが社会構成主義的な学び（広石、2005）であることが指摘されている。２つめは、ワークショップの構造や学習環境デザインの原則を明らかにする教育工学的研究である。ワークショップデザインの道具として「TKF（つくって、かたって、ふりかえる）」「イタリアンミールモデル」「入れ子構造」などの型（茂木、2010）が提案されている。３つめは、ワークショップの企画や運営を担うワークショップ実践者（ファシリテーター、ワークショップリーダー、ワークショップデザイナーなどと呼ばれる）に焦点を当てた研究である。ワークショップ実践者に求められる資質に関する議論や、熟練者のもつ知識を発話から明らかにする研究などが行われている。

学校教育で行われるワークショップに関する研究は、演劇教育、美術教育、特別支援教育、大学教育などの領域で実践研究が進められている（苅宿・佐藤・高木、2012；佐藤、2011）。しかし、ワークショップ型授業を行う「教師」の育成に焦点を当てた研究は、森ほか（2012）があるもののほとんど行われていない。ワークショップにおける学びは、知識やスキルの習得ではない。また、ファシリテーターも知識やスキルを教えることはしない。そのため、「学習とは正しい知識やスキルを習得することだ」という学習観を持っている教師は、「ワークショップに参加している子どもたちは確かに楽しそうだが、何も学習していないのではないか」という戸惑いを覚える。ワークショップ型授業での学びを意味あるものにするためには、教師の側が社会構成主義的な学習観を受容し、ワークショップにおける学びについて十分に理解する必要がある。

２．研究の目的

21 世紀の学校教育では、知識や技能を身につけるだけでなく、それらをツールとして活用し、協働で正解のない課題を解決することができる力の育成が求められている。ワークショップ型授業は、知識基盤社会に必要とされる資質・能力を育成する有効な教育方法であり、ワークショップ型授業の実践力はこれからの教師にとって不可欠であると考えられる。

しかしながら、現状では教師がワークショップ型授業について学ぶ機会はほとんどなく、学校教育にワークショップを導入する上で大きな障壁となっている。例えば、伝統芸能の実演家によるワークショップ型授業（城間、2011；城間・茂呂、2007； Shiroma & Moro、2011）では、教師は実践を通してワークショップ型授業の意義や教育方法について学習しており、実践に関わり始める段階では授業のイメージがつかめず不安を抱えたり、試行錯誤したりする姿が見られた。

本研究では、「正解のない課題を参加者が全員で探究する」というワークショップの学びのプロセスが可視化されやすい芸術家との協働による授業を対象として、ワークショップ型授業を行う教師にとって必要な授業実践力を明らかにするとともに、教員を目指す学生及び現職教員を対象としたワークショップ型授業の実践力育成プログラムを開発する。

３．研究の方法

(1) 初等中等教育におけるワークショップ型授業の実践例の調査

総合的な学習や伝統文化の教育として実施されている、ワークショップの要素を含む授業実践について、実践報告を収集するほか、現地での観察調査、関係者へのインタビューを行う。

(2) 教員養成教育における体験型プログラムに関する調査

体験学習を重視した教員養成プログラムの事例について調査し、プログラム内容や成果、体験による学生の学びの過程について分析する。

(3) 教員養成系大学での芸術家との協働によるワークショップ型授業における学習過程の分析

教員を目指す学生を対象として、芸術家との協働による授業を計画、実施し、振り返りレポート等の成果物の分析を行う。また、自身の教育観、学習観、コミュニケーション観、知識観への気づきを促す振り返りの方法について検討する。

(4) ワークショップ型授業の実践力育成プログラムの開発

教員養成系大学の学部レベルの授業として、ワークショップ型授業における学びについて理解することを目的としたプログラムを計画、実施し、プログラム評価を行う。また、現職教員を含む大学院レベルの授業として、ワークショップの学習論と技法について体験的に学ぶことのできるプログラムを計画、実施し、プログラム評価を行う。

４．研究成果

(1) ワークショップ型授業における教師の実践力

初等中等教育におけるワークショップ型授業の実践例から、ワークショップ型授業を行う教師の実践力とはどのようなものかを検討した。ワークショップ型授業を実践する教師には、「授業」の実践者として、ワークショップの専門家とは異なる役割や能力が求められる。特に、授業やカリキュラムを構想する力、地域や外部の専門家などと連携する力が重要である。また、実践を継続・発展させていく上で、教員個人の実践力のみならず、学校全体として取り組んだり、支援体制を整えたりする組織マネジメントの重要性が示唆された。

地域の社会人や専門家など学校外の人材を活用してワークショップ型授業を行う場合、学校内外の連携が必須となる。継続的に外部の専門家を招きワークショップ型の実践を行っている教員と専門家にインタビューを行い、どのように実践を意味づけることにより、両者の協働が可能となっているのかを分析した。教師の語りと専門家の語りは一部重なっており、両者にとって利用可能な言説があることが明らかになった。教師の言説と専門家の言説は互いに部分的につながることで、全体として協働を可能にする言説空間を構成していた。

学校内外の連携では、学校の個別の要望を聞いたうえで外部人材とのマッチングを行うコーディネーターが大きな役割を果たしている。コーディネーターへのインタビューから、コーディネーターが自身の立場をどのように認識し、学校と外部人材の間をつなごうとしているのかについて分析した。コーディネーターは、学校の要望を聞いて活動を支援するだけでなく、外部人材の状況や願いを理解した上で学校に働きかける積極的な調整を行っていることが明らかになった。

(2)教員養成教育における体験型プログラムのカリキュラムデザイン

ワークショップ型授業を実践するために必要な力を身に付けるには、講義で知識を得るだけでなく、体験を通して学ぶことが有効だと考えられる。教員養成教育で実施されている体験型プログラムにおいて、学生がどのように学んでいるのかを分析した。体験型プログラムにおける学生の学びは一人一人大きく異なるため、実践的指導力を向上させるにはリフレクションが不可欠であり、プログラムの中に効果的に組み込む必要があることが示唆された。

(3) 教員養成系大学での芸術家との協働によるワークショップ型授業における学習過程

教員養成系大学の１年生を対象として、芸術家との協働によるワークショップ型授業（全 15 回）を計画、実施した。授業では、外部講師を招き多様な表現を経験したり、クラス単位で身体を用いた表現作品を作って発表したりする活動を行った。最終回の授業では、授業全体の振り返りのため、学生がペアになって、授業で考えたことや感じたことを質問しあい、インタビューの相手が何を学んだのかを文章にまとめる活動を行った。相互インタビューの報告書（149 名分）の記述内容について、受講生の表現観（コミュニケーション観）と学びとの関連に焦点を当てて分析を行った。学生の記述からは、表現について語る際に用いられる２つの対立する解釈レパートリーが見出された。一つは、発信者が伝えたい内容を適切な方法によって伝えることが表現であり、技術を身につけた人が行う特別な行為とみなす「導管モデル」である。もう一つは、発信者だけでなく受け取る人がいるから表現が成立するのであり、あらゆる行動が表現になりうるし、多様な方法で表現することが可能であると考える「意味生成モデル」である。解釈レパートリーによって、教師のコミュニケーションのあり方や授業への参加の仕方に関して特定の立場が構成されることが示された。

(4) ワークショップ型授業の実践力育成プログラムの開発

教員を目指す学生(学部２年生)を対象に、ワークショップに対する関心を高め、ワークショップの学びについて理解を深めることを目的とした入門レベルのプログラムを計画し、実施した。プログラム内容は、①インプロゲームによるアイスブレイク、②ワークショップに関する講義、③グループワーク「ワークショップ型授業を考えよう」、④発表、⑤振り返りから構成され、所要時間は 90 分であった。講義部分ではワークショップの定義、広がり、学びの特徴を教員が説明した。その後、2 グループに分かれ、小学校の授業を想定してワークショップ型授業のプランを作成した。プログラムの前後での学生の変化を把握するため、講義の前と振り返りのタイミングで、ワークシートに記入する時間を設けた。記述内容の分析から、プログラムを通して、ワークショップに対する関心が高まり、学校教育でも児童生徒の学びを促すために活用できると考えていることが明らかになった。

また、ワークショップの手法を取り入れ、現職教員が自身の教育実践の根底にある価値観、強みや課題に気付き、これからの取り組みを明確にすることを目的とした、半日のプログラムを試行した。参加者によって振り返りの深さにばらつきがあり、振り返りを促す方法に大きな課題が残った。

さらに、現職教員を対象として、ワークショップにおける学びについて理解するとともに、学びのプロセスを支援することを目的としたプログラムを計画中である。プログラム内容は、①ワークショップにおける学習の理論、②ワークショップ体験とリフレクション、③ワークショップのプログラムデザインと評価、④ワークショップのファシリテーションから構成され、受講者が実際にワークショップを企画する。平成 28 年度中にプログラムを実施し、成果と課題について分析を行う予定である。

＜引用文献＞

① 広石英記（2005）ワークショップの学び論:社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義、教育方法学研究、**31**、1-11.
② 苅宿俊文、佐伯胖、高木光太郎（2012）ワークショップと学び（全３巻）、東京大学出版会
③ 茂木一司（2010）協同と表現のワークショップ―学びのための環境デザイン、東信堂
④ 森玲奈、内記麻子、北川美宏、木原俊行、小柳和喜雄、山内祐平（2012）ワークショップにおける理解向上を目的とした教員養成授業におけるコース開発、日本教育工学会論文誌、**36**(Suppl.)、61-64.
⑤ 中野民雄（2001）ワークショップ―新しい学びと創造の場―、岩波新書
⑥ 佐藤信（2011）学校という劇場から―演劇教育とワークショップ、論創社
⑦ 城間祥子（2011）教室の内と外：コラボレーション型授業の創造、茂呂雄二・田島充士・城間祥子（編）社会と文化の心理学：ヴィゴツキーに学ぶ、世界思想社、pp.207-222.
⑧ 城間祥子、茂呂雄二（2007）中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程―「参加としての学習」の観点から―、教育心理学研究、**55**(1)、120-134.
⑨ SHIROMA Syoko and MORO Yuji (2011) Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity、 Paper presented at ISCAR 2011、 Rome、 Italy、 September 5-10、 2011.

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計７件）

① 城間祥子、教員養成課程におけるワークショップ型授業の実践力の育成：ワークショップの学びの理解を目指したプログラムの開発【発表確定】、日本教育心理学会第58回総会、2016年10月8日～10日、サンポートホール高松・かがわ国際会議場（香川県・高松市）
② 城間祥子、教員養成系大学における表現教育、日本高等教育開発協会平成 27 年度第二回研究会、2015 年 12 月 12 日、東京大学（東京都・文京区）
③ 城間祥子、教員養成系大学における初年次学生のコミュニケーション観：相互インタビュー報告の記述分析、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 26 日、朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）（新潟県・新潟市）
④ 城間祥子、外部人材を活用した伝統・文化の教育におけるコーディネーターの語り：実演家と学校をつなぐ主体の位置取り、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日、神戸国際会議場（兵庫県・神戸市）
⑤ 城間祥子、シラバスとルーブリックの開発、第 4 回高等教育開発フォーラム、2014 年 9 月 19 日、新潟医療福祉大学（新潟県・新潟市）
⑥ 城間祥子、専門家との連携による伝統・文化の教育に関する教員の語り、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 17 日、法政大学（東京都・千代田区）
⑦ SHIROMA Shoko、 Using the Learning Management System for Encouraging Self-reflection on Expressive Actions in Higher Education、 HCII 2013、 21-26 July、 2013、 Las Vegas (USA)

〔図書〕（計１件）

① キャリー・ロブマン、マシュー・ルンドクゥイスト著、ジャパン・オールスター（茂呂雄二、佐々木英子、太田礼穂、陳晶晶、伊藤　崇、石田喜美、松井かおり、山口（中上）悦子、城間祥子、新原将義、広瀬拓海、北本遼太、有元典文、岡部大介、香川秀太、若林庸夫、守下奈美子、郡司菜津美）訳、新曜社、インプロをすべての教室へ：学びを革新する即興ゲーム・ガイド、2016 年、210

６．研究組織

(1)研究代表者

城間　祥子（SHIROMA、 Shoko）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・講師
研究者番号：３０４５７３７９